

音楽を通じた「実感」としての共生経験

—先生方とともに創り上げたコンポジウム—

千葉 泉*

Izumi CHIBA

1. はじめに

本稿は、この三年半の間、音楽の実践を通じて、筆者と他者との間に実現した協働的な経験と、その過程で筆者が得た共生の実感を記述することを目的とする。

一昨年(2017)の4月、ぼくが所属する人間科学研究科における改組の一環として、共生学系が新設されてから、もうすぐ二年になる。同学系の立ち上げの時期を含めると、すでに三年半が経過したが、この間ぼくは、実にさまざまな人びとと、「楽しく」かつ「深く」交流する多くの機会を得た。

「さまざまな人びと」とは、これまで交流がなかった他系に所属する先生方や学生・院生たち、そして一般の皆さんである。ぼくは、これらの、自分にとって「未知」で「異質」な人々とともに歌い、楽器を演奏することを通じて、「感情レベル」で交わった。そして、この「ともに歌う」という、一見取るに足らない行為を通じて、その場に即興的に、高度に共感的な空間が出現すること、つまり、短時間かつ些細なレベルであっても、「共生できた」という実感を幾度となく経験した。

本稿では、この三年半の間に、音楽を通じて、他者とぼくとの間に協働が生成したプロセスと、その過程で経験された感動や手ごたえを、先生方のレスポンス的なコメントも交えて間主観的に記述する。そして、そのことを通じて、コミュニケーションの手段、および「共生の技法=アート」としての音楽の意義や可能性を示唆する。

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生社会論 (guitarron@gol.com)

2. 「居場所」がなくなる！－改組ショック

今から三年半前、ぼくが所属する人間科学研究科の教授会で、大規模な改組の計画が発表された。それは、文科省の指示に基づき、人間科学研究科の将来を見据えてのことだった。

その後、改組に向けての議論が本格化、および具体化する過程で、その中核的な柱の一つとして浮上したのが、「共生学系」を新設するという構想だった。この共生学系については、新しい、極めて学際性の強い領域ということもあり、既存の、確立された学系に所属する先生方の中には、当初、否定的な立場の方もおられ、その設立が実現するかどうかは不透明な状況だった。

一方、当時ぼくが所属していたのは、10年前に大阪大学と大阪外国語大学が統合した際、ぼくを含め、外大から人科に移籍してきた教員が多くを占める、グローバル人間学という専攻および学系だった。そして、このグローバル人間学専攻・系（以下、「グローバル」と略）の方は、改組に伴い、消滅する可能性が高かった。

グローバルは、外大出身の先生が大半を占めることもあり、ぼくの数少ない特長である「音楽的な資質」を活かした活動を、優しく見守ってくださる方が多かった。その意味で、グローバルは、ぼくにとって安心して活動できる「居場所」だったのだ。その「居場所」が消滅する！まさに青天の霹靂だった。もう、「自分らしさ」を発揮しながら、大学で働くことができなくなるかも知れない……。ぼくの心は真っ暗になった。

それに加えて、運悪くその年は、学系の代表である幹事教授という役回りが、ぼくに当たっていた。つまり、改組という、「自分の居場所の消滅」を意味する（であろう）難題に対し、みずから率先して対処しなければならないという、なんとも苦しい立場に立つことになってしまったのだ。ほとんど鬱といってもいい状態になったぼくは、「早期退職」や米国ニュー・メキシコ州への移住などの選択肢を、真剣に考えるようになった。

3. カミングアウトに成功したあの「忘年会」

ところが、幹事教授として改組に取り組む過程で、研究科長であられた中道正之先生（行動学系にご所属）と、幾度となくお話しさせていただくうちに、この件に関するぼくの考え方は少しずつ変わっていった。それは、改組の本質が、人間科学研究科が設立当初に掲げていた理念、すなわち、人間や社会に関して研究する、さまざまな分野の研究者たちが、深く交流し、積極的に協働することによって、真の人間科学を構築するという目標を、今こそ実現しようという思いにあることを、理解できるようになったからだった。

こうして数か月が経過したのち、毎年、年末に開催される研究科の忘年会が近づいてきた。恥ずかしいことに、二大学統合後の7年間、ぼくはそれまで一度もこの忘年会に出席したことがなかった。自分のような人間を、他系の立派な先生方がまともに相手にしてくださるとは思えない、という劣等感のせいで、自分から積極的に交流する気にはなれなかったのだ。

とはいえ、自分が学系の幹事教授を務めていたこの年は、さすがにそう言ってもおられず、先頭に立って出席するしかない、と腹をくくった。そう決意した瞬間、ある大胆なアイデアが頭に浮かんだ。「忘年会のアトラクションとして、南米の曲を演奏して、先生方に一緒に歌ってもらおう、っていうのはどうかな？」それまで一度も忘年会に出たことがなく、全く目立たなかった教員が、いきなり先生方の前でド派手なパフォーマンスをやる！文字通りの「カミングアウト」といえるこの行為は、いま冷静に考えれば無鉄砲以外の何物でもないのだが、不思議なことに、その時は何となく、そうしたいと思ってしまったのだ。

さっそくメールでお伝えしたところ、忘年会の幹事を務めておられた故熊倉先生（行動学系）は、このアイデアを気に入ってくださったようで、当日に開催された教授会の終了時、「今日の忘年会には、サプライズがありますので、ぜひお楽しみに！」と宣伝してくださった。「ハードルが上がった・・・」と少し緊張したものの、先生のお気持ちは素直にうれしかった。

さて、いよいよ忘年会が始まり、名誉教授の先生方や執行部の先生方が、次々にスピーチをなさっていった。こうして宴もたけなわとなったところで、ついにパフォーマンスの時が訪れた。沖縄出身で、三線の演奏者でも

ある院生の金憲祐（キム・ホヌ）さんと一緒に壇上に上がったぼくは、「イラヨイ月夜浜」^①という沖縄の歌と、「オレ・オラ」というスペイン語の自作曲を演奏した。なお、あらかじめ、歌詞を印刷したプリントを先生方に配布しておき、少し練習してからみんなで歌う、という趣向にした。

「オレ・オラ」は、これまでの自分の体験をもとに、多文化共生社会の構築にかける思いを、スペイン語の歌詞とノリのいいラテン・リズムに乗せて創作したぼくのオリジナル曲だ。この歌のサビの部分皆さんと一緒に練習したあと、本番に取りかかった。すると、多くの先生方が手拍子を打ちながら、大声で楽しそうに「オーレ・オーレ・オラ！」と歌ってくれているのではないか！「ともに歌う」という行為を通じて、会場の先生方の心が一つにつながったように感じた。

こうして演奏が無事に終わると、何名かの先生が「とってもよかったよ！」と声をかけてくださった。中でも、興奮した面持ちで、わざわざお話しに来てくださった三名の先生がいた。社会学系の稲場圭信先生、人間学系の中山康雄先生、そして教育学系の岡部美香先生だった。三名とも、お名前は存じ上げていたものの、それまでお話ししたことはおろか、面識すらない方々だった。

稲場先生は、宗教社会学を専門とされ、利他主義や被災地の復興における宗教施設の役割に関し、研究・実践の両面ですぐれた業績を挙げられておられる方だ。改組をひかえ、事前にグローバルの先生方のことを調べておられた稲場先生は、「コンポジウム^②に興味を持っていた」と告げてくださった。

コンポジウムというのは、「コンサート+シンポジウム」の略語で、硬くなりがちなシンポジウムの場に音楽を持ち込み、ともに歌うことで、発表者や一般参加者のところをほぐし、率直で深い語り合いを促進する、という試みだ。ぼくは統合前、つまり外大で教員をしていたころから、この種のコンポジウムを数年間にわたって実践した経験があった。

この忘年会での演奏について、稲場先生は、次のように振り返ってくださった。

当日の千葉先生の演奏とトークに圧倒されました。曲の背景について語り、会場の皆を引き込んでいく。皆で練習したことも歌ったこともない曲を、その場で千葉先生のリードにより練習。そして、すぐに本番で皆が歌っている。

音楽のもつコミュニケーションの力に感動しました。事前に調べて頭で理解していたコンポジウムの可能性を、この時、私は確信したのです。その後、人科のプロジェクトでコンポジウムを企画することを千葉先生に提案しました。忙しくなりますが、私たちが、新しい社会的取り組みの企画や運営でしり込みしては、学生たちに社会実践、共生、市民社会など語れないと共に歩みだしたのです。

千葉先生は、人類学者としての専門性を持ち、自分の体験をもとに音楽で世の中に大切なものを問いかけていきます。しかも卓越したシンガーソングライターとして。学術的議論を公共のアリーナに開き、音楽という五感に訴える身体的な技法を取り入れて共に語る。問答無用とばかりに強い言説が社会を覆い尽くそうとしている今、あらたな共生のアートが誕生したのが、あの時でした。

また、同じように満面の笑顔で声をかけてくださった、教育人間学分野の岡部先生は、この時のことを次のように回想してくださった。

あの時は、私も人間科学研究科に赴任したばかりで、忘年会ではかなり緊張していました。その緊張を、三線の緩やかなリズムと明るく伸びやかな千葉先生の声解いてくれました。会場が急に広く明るくなって、息がしやすくなったかのように感じたのを覚えています。きっと、千葉先生のもつ「他者に開かれた態度」、「他者を受け入れる準備ができていく姿勢」に、私はおのずと呼応していたのだと思います。そうでなければ、いくら楽器の音色や声に心を和まされたからと言って、初めてお会いする年長の先生に気軽に話しかけに行ったりはできません。

当時はコンポジウムが何なのか、私にはまったくわかりませんでした。稲場先生と千葉先生が楽しそうにコンポジウムのお話をされているのも目の前でうかがっていましたが、まさか自分がそれをする事になるとは、しかも千葉先生とコラボですることになるとは、その時は思いもしませんでした。

以上見たように、ぼくは二大学の統合によって、人間科学研究科に所属して以来、自分が抱いていた劣等感のせいで、他系の先生方と交わることは消極的だった。そのぼくが、改組を契機として、思い切ってカミングアウトすることで、「アナ雪」のヒットより前に「ありのままの自分」をさらけ

出してみた。それにも関わらず、いや、むしろさらけ出したおかげで、それまで全く交流することができなかった先生方と、深くつながるチャンスを得たのだ！

忘年会でのこの経験を通じ、改組や、その結果、新しく設立される共生学系に関するぼくのイメージも、大きく変わった。もしかしたら、「自分の居場所がなくなる」どころか、これまで以上に積極的に、自分の持っている数少ない資質を活用していけるかもしれない……。早期退職やニュー・メキシコ州への移住という選択肢が、とりあえず、ぼくの意識から消去された瞬間だった。

4. 音楽で共鳴し合うコンポジウム

翌年の4月、さっそく稲場先生のアイデアが形となった。研究科に所属する教員の意欲的な学術的・実践的企画を支援する、ヒューマン・サイエンス・プロジェクトという資金がある。この資金を得て、これまで災害復興支援に携わってこられた先生方の研究や実践の成果を一般の人々に伝えるために、「利他主義」をテーマとする一連のコンポジウムが開催されることになったのだ。

2015年の12月初旬、記念すべき第1回目のコンポジウムが開催されたのは、京都府の北東に位置し、ゆたかな田園や森林が広がる京北町だった。1970年代に、進歩的なメッセージを発信するアーティストたちの拠点となっていたお寺が、現在では、主に町民が企画するイベントを行うスペースとなっている。その場所で、稲場先生、岡部先生をはじめとする教員や院生・学生、そして地元の人たちが板間の間に座し、囲炉裏を囲んで文字通りひざを突き合わせながら、コンポジウムは行われた。

このコンポジウムで、発表者の先生方や一般参加者の心をリラックスさせ、率直な議論を促進したのが、「ともに歌う」という行為だった。先述のオレ・オラのほか、ラテンアメリカにおける黒人奴隷制の歴史を、現代の視点から辛辣に批判した「サンバランドー」⁽³⁾、宮城県仙台市で生まれ育った兄の要請で、東北の震災直後にぼくが創作した復興応援歌「それでも桜は咲く」⁽⁴⁾など、さまざまな曲を、現地在住の音楽家である岸本タローさん（笛

奏者)や熊澤洋子さん(バイオリン奏者)の力も借りて演奏し、皆さんとともに歌っていった。

これらの歌の合間を縫って、稲場先生をはじめとする先生方の発表が行われたのだが、それに対して、辛口のコメントを含む、実に率直な意見や質問が、参加者の口から次々に発せられていった。また、先生方も決して偉ぶることなく、地元の参加者と同じ目線で、そして穏やかな口調で、フランクかつ真摯に応答し、またコメントなさる姿が印象的だった。

このコンポジウムの参加者の中に、神戸の震災を契機に、各地で発生してきた震災の復興の過程で、ボランティアが果たすべき役割について、骨太な実践と研究に携わってこられた渥美公秀先生(行動学系)がおられた。先生は、翌日のメールで、京北町のコンポジウムとそこで歌われた復興応援歌「それでも桜は咲く」に感銘を受けられたこと、また、その感動を、次回、岩手県野田村で開催される予定のコンポジウムにも、何とか持ち込みたいと思っておられることなどを、熱い言葉で伝えてくださった。そして、長い間弾いておられなかったため、少々ほこりをかぶったフォーク・ギターを引っ張り出し、「それでも桜は咲く」を、何度も一緒に練習してくださった。

こうして、翌2016年の1月11日に、岩手県野田村にある阪大のサテライトで、第2回目のコンポジウムが開催された。当日は、現地の中学校や高校の先生方や生徒さんたち、コーラス・グループに属する年配の皆さんなど、さまざまな年代の方々が集まってくれた。

冒頭にオレ・オラを全員で歌ったあと、渥美先生が、「被災地のリレー」と題して、これまで実践してこられたご自身の活動のご経験について話された。その後、神戸の震災被災地で生まれた「満月の夕」、兵庫県佐用町での水害を祈念し、作曲家の上田益さんが作曲した「大切なふるさと」、そして東日本大震災の復興応援歌である「それでも桜は咲く」などの歌を、現地の中学校で音楽の授業を担当されている小林先生の奏でるピアノ、そして渥美先生やぼくが掻き鳴らすギターや三線の音色をバックに、参加者全員で心を込めて歌っていった。

コンポジウム終了後、ブラスバンド部に所属する男子中学生が、こんな感想を口にしてくれた。

今日は、歌ですごく励まされました。次は、ぼくらが自分たちの音楽で、他

の被災地の人たちを励ます番です。それができたときこそ、本当の復興だと思えます。

驚いたことに、小林先生によるとこの中学生は、はにかみ屋さんで、ふだん人前で積極的に話すことなどないのだという。「気持ちを込めて、ともに歌う」という行為が「人の心を開かせる」、その力を実感した瞬間だった。

これら二つのコンポジウムでの体験を、渥美先生は次のように回想しておられる。

災害復興の現場では、現地の方々と外部から訪れるボランティアや専門家が、被災者—支援者という関係を超越した（何か融け合うような）信頼関係を築き上げることが大切で、そのためには、楽しいことを一緒に行い、一見無関係な会話を積み重ねていくことが大切だと考えています。京北町で体験した風景は、まさに、その1つでした。歌うことを一緒に楽しみ、初めて会う人たちの間でも何気ない会話が弾んでいく。そして、多様なアイデアが生まれてくる予感。「これや！これを野田村へ！」と感じ、早速、千葉先生にメールしました。

野田村では、何か一工夫したいと思いました。それは、被災地に関する曲を入れてもらうこと、そして、演奏できる人は演奏してもらうこと。KOBEの曲、佐用町から生まれた曲、そして、東日本大震災を承けて千葉先生が作曲された曲をリクエストし、自分も中学生の頃に弾いていたギターを取り出して、千葉先生にリハビリをお願いしました。

コンポジウム当日は、日頃からお会いする人たち、初めて参加される人たち、そして中学生も来てくれました。歌が始まると、千葉先生の巧みなトークとあいまって、瞬間的に1つになって見事な一体感が生まれました。終了後も会話は終わることなく続き、またやりたいねという言葉を残して皆さん笑顔で帰って行かれました。

千葉先生には、その後も現地で行う授業で貴重なご講義と演奏を行っていただいたり、震災で家や田畑を失いながら、見事に復活を遂げられた野田村の農家の方を讃える、地元民謡の替え歌を作って頂き、ご披露下さったりもしました。また近々、千葉先生にお越し頂いて、コンポジウムを開催して、野田村の方々との信頼関係をさらに深めていきたいと思っています。

他方、先述の忘年会を契機に親しくさせていただいていた、教育学系の岡部先生のご発案で、「想いをはせる」というタイトルの、とてもユニークなコンポジウムも誕生した。

それは、ぼくが南米のチリにおいて、自分が「歌手」として参加したことのある、幼児の葬礼の場で、最後に歌われる「アンヘリート^⑤のお別れの歌」が題材となっていた。この歌の特徴は、「歌手が亡くなった幼児に代わり、一人称（ぼく、わたし）で、悲しみにくれる親兄弟や親族に、優しいお別れの言葉をかけていく」ことで、列席者に、悲しみを昇華する契機を供する、という点にある。コンポジウムは、スペイン語で歌われるこの歌を、歌詞も一切の解説も事前に提供することなく演奏し、それが「誰から誰への、どんなメッセージであるか」を、参加者に想像してもらい、という試みだった。

当初大人向けに企画されたこのコンポジウムは、その後、中学生を対象とする形でも複数回行われた。いずれの場合も、参加者たちの多くが、一度も聞いたはずのない、何語で歌われているのかすらわからない歌の中に込められている切ない想いを、驚くほど、ほぼ正確に言い当てていった。人は歌詞、つまり文字で表せる情報だけでなく、「メタ・メッセージ」、すなわち文字以外の情報、たとえば、身振りや手振り、雰囲気、顔つき、声の調子などを使って、多くの情報を伝達したり、察知したりすることができる。このコンポジウムは、そのことを雄弁に証明する実験となった^⑥。

他方、ぼく自身にとっても、このコンポジウムは、大変大きな学びにつながった。日本から見て、地球の裏側に位置する異国の地で修得した、ただローカルで「風変わりな」民謡と思っていた歌が、このように普遍的なことがらを実証するために役立つ。まさに「目からウロコ」の体験だった。それは、言葉やコミュニケーションに関し、深い思惟を重ねてこられた岡部先生とのコラボでなければ、絶対に可能とはならなかったと断言できる。

一方、岡部先生も、これらのコンポジウムを振り返って、次のようなご感想を寄せてくださった。

コンポジウム「想いをはせる」は、私が初めて千葉先生の歌うチリの民謡「アンヘリートのお別れ」を聴いた時の〈驚き〉がベースとなっています。曲が始まるや否や、「生きなければ」という思いを奮い立たせるような力強い、と

はいえ、どこかもの哀しいメロディーと千葉先生の圧倒的な声量とに惹き込まれ、曲が終わるまで我を忘れて聴いていました。歌詞を読んだ後は、その内容にしばらく絶句するしかありませんでした。この経験を他の方々とも共有することができないか、と考えたのが、このコンポジウムの始まりです。

このコンポジウムは、すでに8回、時と場所と人を変えながらも同じ内容でさせていただいていますが、私はそのつど〈驚き〉をもってこの曲と出会って直しています。このような経験を可能にするのは、いったい何なのでしょう。

古来より、当たり前すぎてあらためて振り返ることもない日常のなかで〈驚き〉と出会う時、人は知的探求を始める、といわれています。コンポジウム「想いはせる」は、日常のなかでアカデミズムの芽を息吹かせる一つの大切な機会なのだと思います。

以上見たように、「忘年会で歌う」という冒険的なカミングアウトをきっかけとして、ぼくは、それまで全く面識のなかった他系の先生方と協働するチャンスを得た。そして、その結果実現した複数のコンポジウムの経験を通じ、さまざまな社会的なコンテクストにおいて、音楽が持つ「人のこころをつなぐ」力、すなわち共生的な状態を生み出す力を、肌で感じることができた。

5. 山田先生との協働から生まれた「おさるさんソング」

昨年の3月に行われた第6回目の、すなわち昨年度最後のコンポジウムから、「モニートス・デ・アワジ（淡路島のおさるさん）」⁽⁷⁾と題する、とっても陽気なスペイン語の曲も生まれた。この曲が誕生した経緯は以下の通りだ。

あれは、紆余曲折の末、共生学系の設置が決定し、その立ち上げ準備が始まっていた一昨年の6月のことだった。一般の人が聞きなれない「共生学」という系の理念を、ビジュアルな形で理解してもらうためのロゴを、先生方みんなアイディアを出し合って作ることになり、そのことを目的とした会合が催された。会の運営を担当したロゴ作成の専門家に、まずブレイン・ス

トーミングをするために音楽が必要、と示唆された司会役の稲場先生が、会の直前になって、オレ・オラを演奏してほしい、とぼくに依頼して来られたのだ。

急なお話だったので、少し緊張しつつも、頑張って先生方に声をかけながら、何とか楽しく皆さんとオレ・オラを歌い終えることができた。すると、その間、ぼくの様子をじっとご覧になっておられた方がいた。淡路島に生息するニホンザルの生態を研究なさっている山田一憲先生（行動学系）だ。

歌が終わったあと、先生は、みんなでオレ・オラを歌っている時に、ぼくが取っていたコミュニケーションの方法に強い興味を抱いた、と伝えてくださった。サル学という、ぼくが全く縁もゆかりもないと思っていた分野の先生が、自分が実践する音楽に、真摯な関心を示さしてくださった！素直な喜びを感じたぼくは、さっそく先生を休憩室にお誘いし、お話しすることにした。

山田先生は、ニホンザルの生態を研究することは、人間の行動や社会のあり方を考える参考にもなること、そして、演奏するときに、ぼくが他者に対して働きかける様式が、サル社会におけるコミュニケーションの方法に鑑みて、とても興味深くてすごいと思う、とほめてくださった。

この時のことを、山田先生は以下のように回想しておられる。

共生学系の先生方が、会議でオレ・オラを歌っておられたことは強く印象に残っています。私は前年の忘年会を欠席していましたので、しらふの先生方が昼間の大学の会議室で歌を歌い始める姿に驚きました。そして何よりも、それを導く千葉先生の演奏と合いの手の巧妙さに引き込まれました。なぜか声を出して一緒に歌ってしまう。なぜか手を叩いて一緒にリズムをとってしまう。そして何かを共有した楽しい気分になる。私には音楽の知識や経験がありませんが、これはコミュニケーションの問題であるように感じました。

行動の同調性や共感についての研究が、心理学や動物行動学の分野で注目されています。一緒に歌を歌い演奏するには、呼吸と音とリズムをあわせる必要があります。このような行動の同調の先に、一体感を感じられる空間が実際に立ち上がってきたことは、興味深い体験でした。

そして、先述したように、年度末の3月に、人間科学研究科内のインター

ナショナル・カフェというスペースで、年度最後のコンポジウムが開催されることになったのだが、そのスピーカーのお一人が山田先生だった。

2月初旬のこと、そのコンポジウムの際にみんなで歌うとしたら、どんな曲がいいだろうか、とぼくは思案していた。「う～ん、南米にもワニや鳥、貝類をテーマにした曲はあるけど、サルをテーマにしたものはないな。どうしようかな・・・。」そんなある日、風呂場で湯船につかっていると、体が温まってリラックスしたせいか、あるアイデアが頭にひらめいた。「この際、<おさるさんの歌>を作っちゃおうか？」その瞬間、「モニートス、モニートス、モニートス・デ・アワジ (おさるさん、おさるさん、淡路島のおさるさん)」という、スペイン語の歌詞が、メロディーとともに口をついて出た。

忘れないうちにと急いで風呂から上がり、そのメロディーと歌詞を mp3 レコーダーに録音し終えたぼくは、すぐに山田先生にメールを書いた。そして、思いついたばかりのこのアイデアをお伝えした上で、歌詞作りの参考にしたいので、淡路島のニホンザルの特長と考えておられることを、箇条書きでもいいので教えてほしい、と頼んでみた。

この提案を喜んで下さった先生からご返信があったのは、数時間後のことだった。「体の弱いサルでも仲間外れにしない」、「弱いサルであっても、強いサルに食べ物を独占されることが少ない」、「集団で固まってもケンカにならないので、サル文字が描ける」など、淡路島のニホンザルならではの、共生的行動に関する特徴を教えてくださいました上、関係者の方が撮影した数枚の写真も添えてくださいました。

これらの情報をもとに、ぼくは三日間で、淡路島のニホンザルの共生的行動をテーマとしたスペイン語の曲「モニートス・デ・アワジ *Monitos de Awaji* (淡路島のおさるさん)」を完成させた。歌詞を創作している最中、おさるさんたちの共生的なあり方に比べ、人間社会では、国家間の紛争やいじめ、虚栄的な行動など、ネガティブな状況が多いことを皮肉の内容も加えることにした。

そしてコンポジウムの当日、山田先生のお話しのあと、おさるソングを演奏したところ、サビの部分はみんなで「モニートス、モニートス」と大合唱になり、大いに盛り上がった。さらに、その様子を撮影したビデオを、山田先生が後日、淡路島モンキーセンターの職員の方々に見ていただいたところ、皆さん、手をたたいて喜んでくださったそうだ。

この曲のご感想を、山田先生はこう記しておられる。

モニートス・デ・アワジは名曲だと思います。サビの部分を一度聞けば、すぐに歌えて、忘れません。モニートス・デ・アワジを聞いた音楽教室に通う小学生たちが、オリジナルの日本語詞とダンスの振り付けを考えたと聞いて、発表会を見に行ったことがありました。発表は素晴らしいものでした。子どもたちは淡路島のニホンザルを実際には見たことがないというお話でしたが、魅力的な歌が、子どもとサルをつないでいました。歌をきっかけにしてサルに興味を持つという、私たち霊長類学者では思いもつかないようなやり方で、淡路島のおさるさんのファンが増えていたことは驚きでした。

その後、「おさるソング」は、モンキー・センターのテーマソングに指定していただき、センター内には、その明るいメロディーが響き渡っている。

6. おわりに

人間科学研究科の改組と共生学系の立ち上げを契機として、ぼくは、自分の有する数少ない特長である「音楽」的な資質を積極的に活用することで、それまで面識のなかった他系に所属する先生方と協働する幾多のチャンスを得た。それは、さまざまな社会的コンテクストにおいて、音楽を用いて率直な議論や意見交換を促進する「コンポジウム」という場を、出席者のみなさんとともに創り上げる機会につながった。

新設された共生学系の三本柱の一つである「アート」は、「芸術・芸能」を意味すると同時に、「技術・技法」を意味する。この三年半は、まさに「共生を実現する技法」としての音楽の力を強く感じる経験となった。それはぼくにとっても、「自分らしく」ふるまいながら、他者とそれぞれの「自分らしさ」を分かち合い、共生できることの意義と喜びを、身をもって体感するという、とても充実した時間であった。

最後に、ぼくに勇気と協働の機会を与えて下さり、また本稿にコメント・感想をお寄せ下さった稲場圭信先生、岡部美香先生、渥美公秀先生、山田一憲先生に深く感謝いたします。

注

- (1) 「イラヨイ月夜浜」は、石垣島（沖縄県）出身の大島保克（作詞）と比嘉栄昇（作曲）の手による作品。
- (2) 「コンポジウム」は、東京大学東洋文化研究所の安富歩教授の考案による造語。
- (3) 「サンバランドー Samba landó」は、同名のペルーのアフロ系伝統舞踊のリズムを用い、チリ人の音楽家パトリシオ・マンズ、オラシオ・サリーナス、ホセ・セベスが創作した作品（1979年）。
- (4) 「それでも桜は咲く」は、You Tube で視聴できる。（以下の URL 参照）
<https://www.youtube.com/watch?v=fR4v5Jk-bGc>（2017/11/21 アクセス）
また、同じ曲のスペイン語版（Aun así el cerezo florecerá）も、以下の URL で視聴できる。<https://www.youtube.com/watch?v=y7swyAUKmg4>
- (5) 「アンヘリート angelito」とは、「小さな天使」を意味するスペイン語。中南米各地に根付いている、幼くして亡くなった幼児が、「天使」のような存在になる、という民間信仰に由来する（千葉 2005:2）。
- (6) 「想いを馳せる」をテーマとするコンポジウムに関する特別報告（岡部・稲場・千葉・中道・栗本・中山・山田・上林・新谷 2017）参照。
- (7) 「淡路島のおさるさん Monitos de Awaji」は、You Tube の以下の URL で視聴できる。<https://www.youtube.com/watch?v=DLHmbEntMaU>（2017/11/21 アクセス）

参考文献

- 岡部 美香・稲場 圭信・千葉 泉・中道 正之・栗本 英世・中山 康雄・山田 一憲・上林 梓・新谷 真美子 2017 「人間科学による一つの狂詩曲—人間科学研究科による利他コンポジウムの報告—」『未来共生学』4:357-385。
- 千葉 泉 2005 「祝祭から昇華儀礼へ—チリ中央部における幼児葬礼の変遷—」『大阪外国語大学論集』31:1-27。